



チュールヒ歌劇場《エジプトのモーゼ》新演出

チュールヒ歌劇場の今シーズン開幕は現代版《エジプトのモーゼ》で、2008年のアメリカ株大暴落が舞台。想像通り、シュロット演じるモーゼはビンラディンだが、ライザー&コリエのペアは限度をわきまえた演出を心掛け、オペラセリアとはいへ、各所にちりばめられているロッシェニ特有の軽やかなメロディとうまく合わせていた。モーゼをテロリストに仕立てたことによる反感は免れないが、聖者と言われる人物でも殺し合いをした時点でみな同等だというメッセージが終幕で明らかになる。エジプト人たちが紅海に飲み込まれる様を奈落で表し、その上に波のパネルが被さると、奥にモーゼが見える。一人這い上ったペルトウージ演じるファラオと向き合う2人の間に、現在のテロや犠牲者達の生々しい写真が貼付けられたパネルが立ちはだかり、ファラオが凝視するところで幕が下りる。歌手陣も皆、安定しており、しっかりと脇を固めていたアロン役のマシアスとシュロットは、多少くぐもった発声なのが、かえって異国情緒を感じさせていた。高音まで確実なカマレーラの王子、アマルテア役のグオは、グルベローヴァを彷彿とさせるような柔らかなのに通る声で、いとも簡単にコロラトゥーラを操ったアマルテア役グオなどの側で、メイは多少輝きを失ったが、母国語を生かした表現の上手さで、純真な主役を無事務めきった。カリニャーニ率いるオケも、ロッシェニの軽さとセンチメンタルなコントラストを、危険を冒しつつも表現していて、世界中の人に観て欲しいプロダクションとなっていた。(中 東生)